文化財見学シリーズ 43　姫路市教育委員会文化部文化課（平成11年９月１日発行）

『城陽校区』をたずねて

城陽校区は、ＪＲ姫路駅の南東部に位置する。校区内には、神戸地方裁判所姫路支部・姫路税務署・兵庫県姫路総合庁舎・姫路市役所など官庁が集中し姫路の中心地を形成している。昭和44年撮影の航空写真を見ると北条から荒川にかけて土地を碁盤の目のように区切った条里制の遺構が残り、この地域が古くから開発されていたことがわかる。奈良時代に編纂された『播磨国風土記』には、「右、英保というは、伊予の国の英保の村の人、到来たりてここに居りき。故、英保の村となづく」という「英保の里」や「飾磨の御三宅」（飾磨区三宅が遺称地に比定されている）が記載されているが、城陽校区がこの中に含まれるのかどうかは今後の研究に待たねばならない。なお、『和名抄』の郷名にも「英保（安母）」の名前が記されている。

その後、荘園制の発達と共に開発が城陽校区全域に及び市之郷・阿保は大野郷に（『兵庫県飾磨郡誌』）、北条・庄田・南条は国衙荘に、上下芝原村（豊沢）は春日保に属している（『荘園志料』）。応仁２年（1468）の広峯神社神官宛の「室町幕府安堵状」によれば、平野村・白国村等と共に北条村が広峯神社領として寄進されている（『兵庫県神社誌』）。また、大永元年（1521）７月、赤松義村の命によって宿村・国府寺村・中村など12ケ村の村民397人が社前に長刀・松明・槍等をもって７ケ日に渡って「神踊」（修羅踊り）を行っている。その12ケ村の中に北条村・南条村・庄田村の名前が見えている（射楯兵主神社文書）。

近世になると関が原の戦いで戦功のあった池田輝政が播磨52万石を加封され、足掛け９年をかけて姫路城を築城し本拠地とした。同時に三左衛門堀の築造に着工した。その後、姫路城主は本多氏・榊原氏・松平氏・酒井氏と変わるが、城陽校区は終始姫路藩領として明治維新を迎える。

明治４年（1871）、戸籍法に基づく大区・小区制の実施に伴い、芝原村・南条村・庄田村・北条村・中阿保村・西阿保村は第８大区（飾東郡）第７小区に属した。

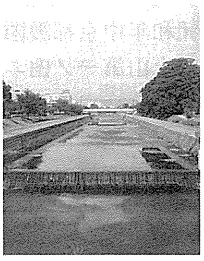
明治８年（1875）、芝原村・忍町・宿村・豆腐町・谷町・南畝村・南畝町が合併して豊沢村が誕生。同９年（1876）には、西阿保村・中阿保村が合併して阿保村が成立。明治22年（1889）、市制・町村制の実施により豊沢村と南条村・庄田村・北条村が合併して、国衙村が成立。同年、阿保村と市之郷村が合併し市殿村が成立。明治44年（1911）には、神谷村及び豊沢村・北条村・市之郷村・国府寺村の一部を除き、国衙村と市殿村が合併し城南村が成立。村名の由来は、姫路城の南に位置するため城北村に対して城南村と名付けたという。その後、昭和10年（1935）10月には姫路市に編入され、現在に至っている。

平成６年７月より国宝姫路城の世界文化遺産登録の祝賀と池田三左衛門輝政の偉業を顕彰するために三左衛門堀に架かる庄田橋周辺を中心に「三左衛門堀・川まつり」が城陽校区を挙げて盛大に行われ、近隣周辺からも大勢の人々が参加して、地域の夏の風物詩になっている。

三左衛門堀跡　古くは長堀、大堀とも呼ばれ、慶長年間、池田輝政によって姫路城外濠と飾磨津を結ぶ運河として掘り進められたが、輝政の死去によって中断され、現在に至っている。『播州名所巡覧図絵』に「北条村より南へ二百間余り、幅二十四、五間の大渠なり両堤、松林あり」と紹介されている。現在、河川公園として整備され、市民の憩いの場となっている。

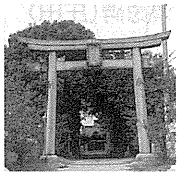
南条大年神社　祭神は穀物守護の大年神。本殿は一間社流造。『村翁夜話集』に「妙見大明神社　神霊ハ大白星」と記されている。明治初年に大年神を祀り大年神社と改称。明治７年２月に村社に列せられる。元は約30m東の位置にあったが、姫路市市川西土地区画整理事業のために現在地に移転した。

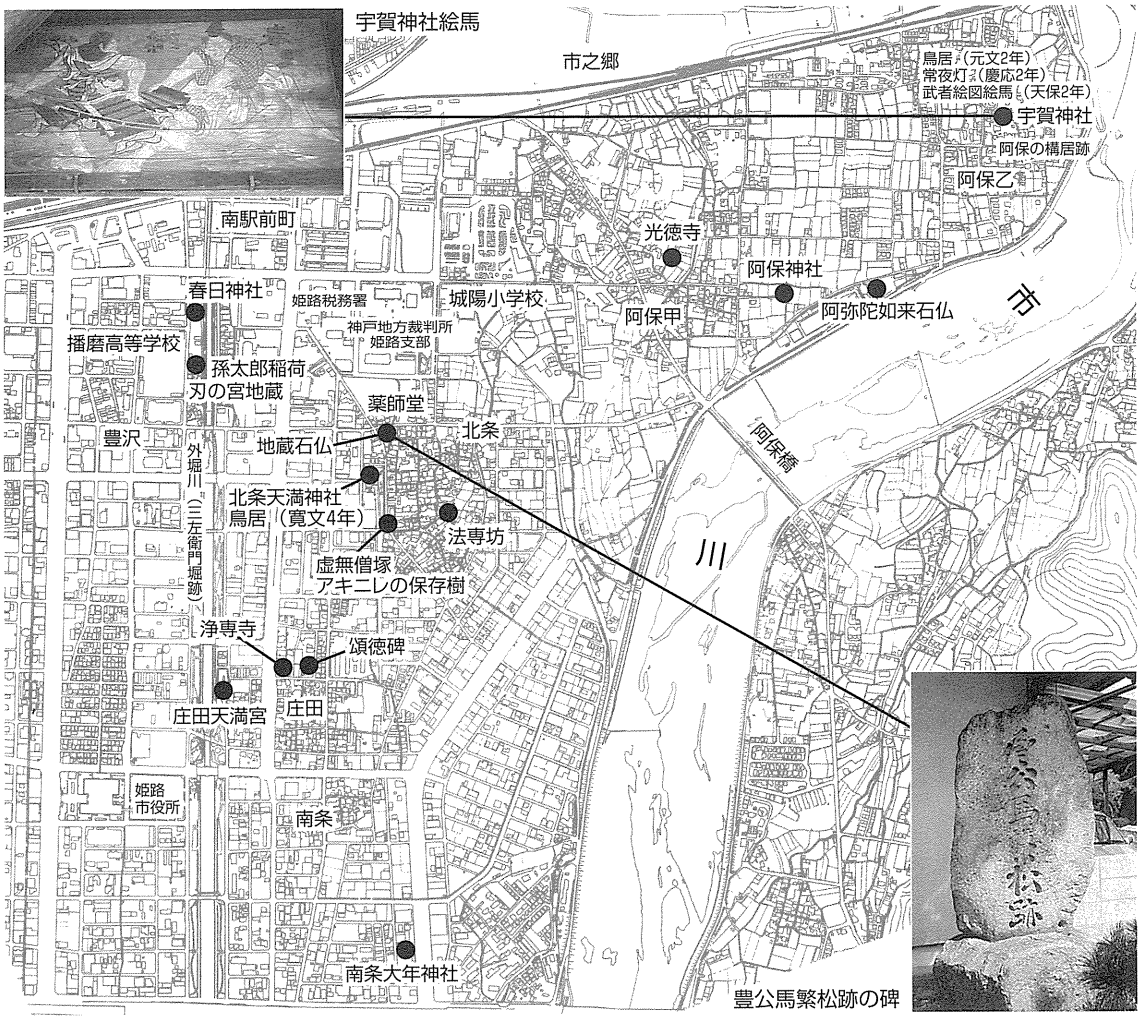
庄田天満神社　祭神は菅原道真。本殿は一間社流造。創立年代は不祥。明治７年２月村社に列せられる。７月25日の夏祭では、境内に用意された熱湯を笹束で四方にまき散らし、無病息災を祈願する湯立てが、また10月９・10日には秋季例祭が行われる。


三左衛門堀跡

三左衛門堀・川まつり

南条大年神社


庄田天満神社



羽林塚　『播州名所巡覧図絵』に「三左衛門堀の北の方に、三左衛門の墓あり、羽林塚という」と紹介されているが、現在その位置がわからなくなっている。『池田家譜』によれば輝政の死後、「播州中市之郷金谷ニ火葬シ遺骨ヲ同所ニ納ム、戒号国清院泰叟玄高、元和年中京都護国院（今盛岳院）ニ改葬、寛文７年丁未二月再備前和気郡和意谷敦土山第一ノ山ニ改葬」と記され、中市之郷金谷で荼毘にふされ埋葬されている。姫路市内には、平野町の正法寺と増位山随願寺に池田輝政の供養塔が建立されている。

池田輝政供養塔
（平野町正法寺）

浄専寺（庄田）　浄土真宗本願寺派に属する。当寺は慶長11年（1606）、専久によって開基。慶応２年（1866）４月、火災で焼失。当時、廃寺になっていた延末村の浄福寺の本堂を買い受けて明治６年（1873）４月に再建。昭和20年（1945）７月３日深夜の姫路大空襲で再び焼失。現在の本堂は、昭和36年に再建されたものである。

浄専寺

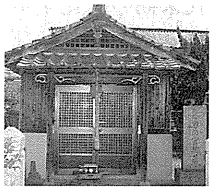
頌徳碑（庄田）　昭和20年７月３日の姫路大空襲で城陽校区は大きな被害を被った。庄田町も焼け野原と化したが、町内会長に選出された新井寅蔵氏、副会長西森熊吉氏を中心に町民一同が協力して、道路の改修や新設、共同浴場の改築、天満神社再建、浄専寺再建など戦後の町の復興に精力的に取り組んだ功績を顕彰するために昭和36年４月に庄田児童公園内に建立されたものである。町の復興の歴史を知る貴重な資料となっている。

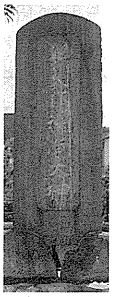
頌徳碑

春日神社(豊沢)　祭神は武甕槌命、天兒屋根命、布都主命、姫神を祀る。『播磨鑑』によれば八木春日ともいい、神功皇后が麻生山に御座の時、大己貴に告げて八木杉を生えさせ、寛和２年（986）８月７日、巨智延昌が勸請して祀ったと伝えられている。江戸時代には板倉勝重より４石８斗９升の社領を寄せられた。『正保郷帳』に芝原村高207石２斗６升の内「高４石９斗８升　春日社領」と記載されている。また、『播磨名所巡覧図絵』には「春日明神」として「春日の荘、芝原にあり。例祭七月廿七日には妻鹿浦海中、鳥井崎へ神幸あり。三月十五日は八杉の御旅に幸す。この時、競馬あり。六月九日、十五日は神前の踊りの馬場にて、藤の花を造りかざして踊る。十五日には行矢祭とて、流鏑馬有りしが、今は怠りぬ」と記されている。

春日神社

刃の宮地蔵(豊沢)　字鍛冶屋にあり、祭神は刀匠三条小鍛冶宗近を祀る。『播磨鑑』に次のような伝承が記されている。宗近は宇佐八幡宮へ神剣を奉納するため京都から筑紫の国に下向する途中、患っていると夜夢で「汝はるはると下らん志神いち早く受け玉ひつ　但し御神は先年当国の松原に移り玉ひぬ　此所にて一ツの剣を作りて松原神宮に奉るへし」と神託を受けたが、相槌がいないので困っていると都より稲荷の神狐孫太郎がやって来て相槌を打ち、小剣を作りだして松原八幡宮に奉納することができた。宗近はこの地で果てたので、里人たちが草堂を造り地蔵を安置して祀った。この刃の宮地蔵に参詣すると口内の病に霊験があると伝えている。また、孫太郎狐は都にも帰らず井上九郎左衛門の屋敷に住み着いていたという。刃の宮地蔵の隣に孫太郎稲荷が祀られている。

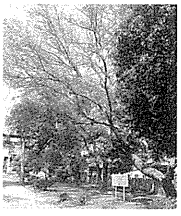

刃の宮地蔵


孫太郎稲荷

北条天満神社　祭神は菅原道真を祀る。創立年代や由緒は火災で社記等が焼失したために不詳。しかし、慶長８年（1603）９月、池田輝政の寺社奉行中村主殿助より「播州飾東郡北条村の天神社領のため、高５石御寄進なされ候、永代社納あるべき候」と記された墨印状があり、また、応仁２年（1468）の広峯神社神官宛の「室町幕府安堵状」で北条村が広峯神社に寄進されていること等から、この神社の創建年代は古いと思われる。境内には恵比須天社、弁財天社、末広大神などの末社が祀られ、寛文４年（1664）に建立された鳥居がある。また、参道には推定樹齢100年から200年といわれているアキニレの保存樹がある。

北条天満神社

寛文4年
建立の鳥居


アキニレの
保存樹

虚無僧塚と人身御供神事(北条)　『兵庫県飾磨郡誌』によれば北条天満宮より三宅八ノ宮にかけて一面藪が広がり、そこに八ツ目イタチが住み、年々田畑を荒し被害が大きいので氏神に祈ると「毎年総領の男女と糠糯２斗４升を神に捧ぐべし」と神託があり、村人はそれに従っていると、ある年当地を訪れた虚無僧がこの事を聞き、「人を護るべき神が人を食うべき謂われなし、妖怪の仕業なり退治せん」と藪に入って八ツ目イタチを退治した。村人大いに喜び年々御供えの２斗４升を虚無僧に与え正覚院に住まわせたという。後に村人協議して、この事を記念するために「オトウ」と称して籤で総領の男女を定め、当番の児童は１月10日、身を清め衣を正して神酒、鏡餅など御供え物を持って神に詣でる人身御供神事が明治末頃まで残っていた。北条天満神社参道入口に表に大きく「虚無僧塚」裏面にその由来を彫った石碑が昭和51年10月に建立されている。

虚無僧塚

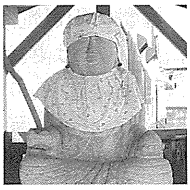
法専坊

法専坊(北条)　浄土真宗大谷派。寛文８年(1668)、空全の開基。『兵庫県飾磨郡誌』によると空全は元東延末村にある法専坊に居た僧であるが、寛文８年、西本願寺派亀山本徳寺の東本願寺派への改派をめぐる紛争である寛文の変（貞照院の一乱）が起きた時、一部の檀徒とともに西本願寺派に踏み止まり、当地に寺を建てて移ったという。その後、東本願寺派に転じ、現在に至っている。

薬師堂(北条)　地元では「乳貰い薬師」として霊験あらたかな名刹として地元民の信仰を集めていたが、昭和20年７月の戦災により焼失してしまっていた。昭和44年７月、有志によって再建され、現在に至っている。お堂の前には、自然石に「豊公馬繋松跡」と大きく彫られた石碑が建立されている。

薬師堂

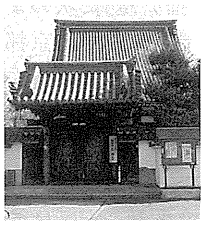
地蔵石仏(北条)　薬師堂西の道端の小さな祠に祀られている。丸彫りで坐像の地蔵菩薩で、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。この地蔵石仏は、江戸時代末期の弘化４年（1847）７月に建立されたもので、蓮華座下の台座に「地蔵尊」及び「弘化四丁未歳七月吉日」の年号と建立者である「北条村念仏講中」「本願主　智誠尼」が彫られ、尼僧の智誠を中心とする北条村の念仏講の人々が祈願を込めて建立したものであることがわかる。


北条地蔵石仏

阿保神社(阿保甲)　字宮前に鎮座する。祭神は天照皇大神。『播州神社考』には祭神として「天照皇大神、品陀別命、天兒屋根命、伍堂社」が記されている。神社の創建年代や由緒については不明。明治７年（1874）２月には村社に列せられている。昭和47年に改築された。

阿保神社

光徳寺(阿保甲)　浄土真宗本願寺派。開基は不詳。明応元年（1492）創立（『姫路紀要』）。『城陽の歩みを求めて』によると英賀から飾磨津に移り、文明年中（1469～87）に姫路に移ったという。元は南町にあったが、昭和20年７月の姫路空襲で焼けたために現在地に移り再建された。


光徳寺

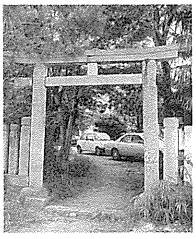
阿保墓苑阿弥陀如来石仏(阿保乙)　阿保墓苑入口の西に蓮華座上に仏高約160cmの丸彫りの阿弥陀如来が、右肩をあらわにした偏袒右肩（へんたんうけん）という衲衣（のうえ）の着方をし、両指は阿弥陀如来の印である上品上生（じょうぼんじょうしょう＝人柄や品質の高尚なことをしめす）の印相（いんぞう）を結び、結跏趺坐（けっかふざ＝座禅を組んだ時の足組み）している。蓮華座の正面には「南無阿弥陀仏」「総骨」と彫られ、背面には「天保二辛卯年三月建之」と建立者である「和泉町　油屋嘉兵衛」「呉服町　馬場氏」など８名の屋号と名前が彫られている。これだけ大きい丸彫りの石仏は、姫路市内では数少なく珍しいものである。

阿保墓苑阿弥陀如来石仏

宇賀神社(阿保乙)　字下長に鎮座する。祭神は通称お稲荷さんと親しまれている素佐之男尊の第６子宇賀ノ魂神。宇賀神社の名称は、昭和４年の大改修時に鳥居の扁額に挙げたもので登記上は稲荷神社である。神社の創建年代や由来について、詳しいことは不明であるが、『村翁夜話集』には「稲荷社　中阿保村氏神　村中持」と記されている。『兵庫県飾磨郡誌』には、「村社　稲荷神社　阿保　祭神　宇賀魂神　当社ハ英保心俊ノ崇祀スル所也トイフ（神社追考）中阿保ノ氏神ニシテ境内四九三坪アリ、節句祭也」と記載されている。阿保（英保）の名は『播磨国風土記』にも見え、早くから開発の進んだ地域であり、神社の創建も古いと考えられる。境内には、慶応２年（1866）６月建立の銘文が刻まれた常夜灯や「元文二年巳四月吉祥日　中阿保村（右柱）」「稲荷大明神　御神前（左柱）」の銘文が彫られた石鳥居がある。また、拝殿には「天保２年」の墨書銘がある「武者絵図」の絵馬が奉納されている。

宇賀神社

阿保の構居　領主は赤松氏幕下の英保大膳助、次郎左衛門尉。宇賀神社の東南に「構ノ内」と称する字があり、堀（ホオリ）・茶園畑・オツボネなどの小字名が残っている。また、市川を隔てた東の山を城山ともいう（『兵庫県飾磨郡誌』）。


宇賀神社石鳥居(元文2年)

■編集　姫路市立山陽中学校教頭　石塚太喜三